

1. はじめに

本発表では、グロスを用いた分析が前提とする、言語記号（形態素）を物体に見立て、さらに複合的な言語表現を複数の物体を組み合わせた物体に見立てるブロックの比喩、とりわけそこに含まれる(1)・(2)の想定を、動的言語観のもとで検討する。

- (1) 定常性の想定：形態素は異なる文脈に現れても常に同じである。
- (2) 合成性の想定：文全体の意味はそれを構成する形態素のみから導かれる。

2. 近似的な説明としてのブロックの比喩

本節では、ブロックの比喩が近似的な説明としては有効であることを確認する。一般に人は、複数の要素と、要素間に成立する関係という仕方で全体を切り分けることによって物事を理解する。たとえば、ある落雷がある火事を引き起こしたという因果推論を行う際には、まず事象全体を落雷事象と火事事象へと切り分け、原因と結果という仕方で両者の関係を把握する必要がある。(落雷事象の前半部と、落雷事象の後半部および火事事象の全体という仕方で切り分けてしまうなどのように)この切り分けが上手くいかなければ、妥当な推論を行うことはできないだろうし、切り分けが全く生じなければ、そもそも推論を始めることもできないであろう。同じように言語分析においても、文などの全体を構成要素（語や形態素）に切り分け、要素の性質（および、そこから導かれる要素間の関係）を組み合わせることで、全体を把握する過程、すなわち合成性の想定に関与を完全に排除することは困難である。

また、ある落雷が火事を引き起こしたという一連の出来事は、落雷事象・火事事象をそれぞれ、あるタイプの事例として把握して初めて捉えられるものである。あらゆる事象は厳密には一回限りのものであるため、何らかのタイプのもとで把握されなければ因果推論の対象となることはできない。推論はあくまで、タイプのレベルで行われるのである。3節で述べるように、動的言語観では言語知識の全体を潜在的・顕在的な出来事であると考えている。すなわち、グロスによる分析の対象となる個別の文ないし発話に現れる具体的な形態素もまた、一種の出来事だということである (Langacker 2019)。出来事としての記号もまた、落雷事象や火事事象と同じく一回限りのものであるため、何らかのタイプのもとで把握され、そのレベルで推論の要素となること、すなわち合成性の想定を完全に排除することは困難である。

以上のように、ブロックの比喩は人間の思考において自然なものであるため、完全に排除することは難しい。さらに、人間の言語知識は定常的なものでも、合成的なものでもないとはいえ、安定したコミュニケーションが可能である程度には変動が少ないし、部分の意味は全体の意味を導く大きな手がかりとなっている。そのため、ブロックの比喩は言語の実態とは乖離しているものの、その近似としては有効に機能している。たとえば、(1)・(2)をそれぞれ(3)・(4)のように読み替えるならば、さしたる問題は生じないと考えられる。

- (3) 弱い定常性の想定：形態素は異なる文脈に現れても概ね同じである。
- (4) 弱い合成性の想定：文全体の意味にはそれを構成する形態素が貢献している。

とはいえ、このような読み替えが成立するのは、グロスによる分析をあくまで比喩として理解する場合に限られる。比喩によってもたらされた性質は、しばしば対象そのものの性質と混同されてしまう（第3発表）。グロスを用いた分析がどれだけ有効なものであったとしても（第2発表）、比喩を実体化し、言語記号をブロックとして捉えることには、やはり問題があるのである（第1発表）。

3. 動的言語観から見るブロックの比喩の問題点

グロスによる分析では、(5)に現れる2つの *a cat* は等しい扱いを受けることになる。もちろん、両者に何らかの共通点があることは間違いない。しかし、同一のグロスが振られることを根拠に、同一の記号であるとまで考えてしまうのは問題である。A の用いた *a cat* は具体的な匹数には（ほとんど）注目しないものであり、だからこそ B は *a cat* を用いて「一匹であれば」という仕方で応答しているのである。

(5) A: I would love to get a cat.

B: A cat would be OK, but cats would be a problem.

(Langacker 2016a: 432)

Langacker (2016a: 432) はこの違いを、A の *a cat* は複数の猫との対比を前提としない段階での、いわばデフォルトとしての一匹であり、B の *a cat* は複数の猫との対比を前提とした一匹であると分析している。すなわち、ここでの *a cat* は知識構造において異なる位置づけを持つのである。本節では、このような見方を可能とする認知文法の動的言語観を提示し、その立場からブロックの比喩の問題点を指摘する。

3.1. 使用基盤モデルとブロックの比喩

本節では、定常性の想定が言語の実態を正しく捉えていないことを、スキーマ的知識を対象として論じる。次の引用から明らかなように、認知文法では（定着した）言語知識は全て使用事象に基づくものであると考えている。

(6) 認知文法では、言語とは慣習化した言語単位の構造化された目録であると規定している。話者の言語知識を構成する単位（すなわち、認知的な「ルーチン」）として認められるのは、実際に使用される表現の一部として直接現れるものか、そこからの抽象化（スキーマ化）やカテゴリー化を通じて生じる、意味構造・音韻構造・記号構造のみである（この制約は実質性要件 (content requirement) と呼ばれる）。

(Langacker 2000: 8)

本節で導入する使用基盤モデルは、このような言語観のもとで、言語知識の全体像を柔軟な知識構造の集合体 (assembly) として捉えるものである。

Langacker (2000: 5 節) は、(語彙と文法の連続性を説明するにあたって、) 二重目的語構文 [send NP NP] を例として次のように論じている。この単位は、実際の使用に現れた、send me a package、send your mother an eviction notice、send Washington a message、などの共通性が心的に繰り返し処理されることによって強化され定着したものである。[send NP NP] は、[give NP NP] などとともに、二重目的語構文の典型例である [TRANSFER NP NP] の事例であり、そのこともまた意味に含まれている。これはスキーマ化・カテゴリー化の関係である。すなわち、[TRANSFER NP NP] は [send NP NP] や [give NP NP] などの共通部分が知識として定着したものであり、また、(知識として定着した) [TRANSFER NP NP] によ

って、[send NP NP] や [give NP NP] などがカテゴリー化される（その一種として位置づけられる）という関係が成立しているのである。このような知識構造のネットワークには他にも、[send NP to NP] や [send for NP] という慣習化した用法が含まれている¹。send が現れるこれらの単位の共通部分が定着すると、[send ...] という単位となる。ここで重要なのは、この単位は、より具体的な知識が定着して初めて成立可能になったものであるということ、および言語使用においては、[send NP NP] のような、より具体的な単位のほうが重要であるということである。

形態素は異なる文脈に現れても常に同じであるという定常性の想定は、典型的にはスキーマ的知識としての [send ...] に当てはまるものである²。しかし、生起環境を問わない [send ...] という単位がまず存在し、それをさまざまな仕方で用いるというのは不自然な想定であろう。Langacker (2016a: 249f.) は、口母音 [a]・鼻母音 [ã] の対立を例に、このことを的確に示している。抽象的な単位が具体的な単位に先立つのであれば、口母音・鼻母音の指定のない母音 [A] がまず存在し、それに口母音化・鼻母音化といった操作を施していることになる。このように考えることで、母音がより体系的に整理できることは確かであるが、口母音と鼻母音の有標性の差が捉えられないこと、それ自体としては観察不可能な要素を基礎に据えることになることなどの問題がある。口母音 [a]・鼻母音 [ã] がどちらもスキーマ [A] の事例であることは事実であるが、その関係はあくまで [a] が定着し、そこからの拡張によって生じた [ã] が定着することを通じて成立しているのであり、たとえば、[ã] が存在しない段階の [a] は（スキーマとしての [A] は知識において存在していないため当然ではあるが）[A] の事例ではないのである。

もちろん、すでに英語を習得している話者の知識には、[send NP NP]、[send NP to NP]、[send for NP] の共通部分としての [send ...] もまた含まれている。そのため、定常性の想定はやはり成り立つのではないかと思われるかもしれない。しかし、仮に言語使用において、かならず [send ...] というスキーマ的知識が（そして、そのみが）用いられるのであれば、send が実際には、すでに定着した構文（や、そこからの拡張）に現れるのが普通であるという事実をどのように説明すればよいのだろうか³。認知文法では、実際の言語使用において参照される知識は、[send ...] ではなく、[send NP NP] のような具体性の高い（場合によっては、更に具体的な知識が使用される）知識であると考え、この事実を説明している。この背景には、使用事象を複数のカテゴリー化によって捉える見方がある。

3.2. 使用事象とブロックの比喩

本節では、言語使用において実際に参照されていると考えられる具体性の高い知識にかんして、定常性の想定・合成性の想定が成り立たないことを明らかにする。Langacker (2008) によると、典型的な言

¹ これらを、[send NP NP] にもとづいて理解した場合には、拡張関係が成立することになる。拡張は、カテゴリー化に用いる知識構造に含まれる要素に、カテゴリー化の対象に当てはまらないものが含まれる場合に生じる、カテゴリー化の特殊事例である。

² 定常性の想定は、便宜的に通時的定常性にかんするものと、共時的定常性にかんするものに分けられる。使用基盤モデルが前提とするように、言語知識は動的なものであり、通時的に定常である（すなわち、ある時点である記号が習得されれば、その記号の形式や意味に変化が生じることはない）と考えるのは事実と反するだろう。また、通時的定常性が存在しないのであれば、共時的定常性もまた存在しないことになる。なぜなら、ある記号が共時的に定常である（すなわち、ある記号が生起環境を問わずに一定である）ならば、当然のことながら、通時的にもまた定常であることにならざるをえないからである。ただし、本発表では、このような通時的定常性を踏まえた議論は脇に置き、グロス実践にかかわると考えられる、タイプ・トークン関係に基づく脱時間化された共時的定常性に焦点を当てる。定常性の想定とはその意味で理解されたい。

³ [send ...] は [send NP NP]、[send NP to NP]、[send for NP] のように使用する、という規則を立てることは、（不可能ではないが）不自然な説明となってしまう。それぞれの単位は、個々の使用に触れることを通じて習得されるものであることからすれば、規則は無用の長物であろう。

語使用とは、話し手・聞き手が同一の場所に留まり、話し手の発話を手がかりとして、それによってカテゴリー化される対象へと両者の注意を向けるコミュニケーションである。ここで重要なのは、発話の目的はあくまで話し手・聞き手の注意を調整することであり、言語記号はそのための手段だということである。

話し手が意図した対象へと聞き手の注意を導くための手段は言語だけではない。以下では **Scott-Phillips (2014)** を参照し、典型的なコミュニケーションのあり方、および手がかりとしての言語の働きを示す。喫茶店でウェイターの目を引きながら、多少わざとらしくコーヒーカップを傾ければ、コーヒーのおかわりを望んでいるということが伝達される。また、相手の目を引きながら、多少わざとらしく野いちごを食べ、お腹を軽く叩けば、野いちごを美味しいと思っているということが伝達される。このような手がかりはまた、慣習的なものである必要もない。話し手・聞き手は（再帰的読心能力により）互いの信念状態をかなりの精度で予測しあっているため、何らかの手がかりを発しさえすれば、話し手の意図した対象へと互いに注意を向けることができるのである。このような場合、手がかりは話し手が聞き手の注意を向けようと意図した対象を意味していると考えられる。コミュニケーションにおける言語記号の使用もまた、注意を調整するための手がかりであるため、同様にその対象を意味として持つことになる。使用された個々の記号がそれ自体として意味を持つように感じられる、すなわち定常性の想定が生じるのは、手がかりと対象の関係が慣習化したことの結果である。

コミュニケーションにおける言語的 hands の役割は次のようなものである。話し手はまず、聞き手の注意を向けたい対象をカテゴリー化する。対象全体に対応するカテゴリーを予め有していることは（ほとんど）ないため、いくつかの断片的なカテゴリー化を組み合わせることになる。これは例えば、〈犬が走っている〉という出来事の全体を一挙にカテゴリー化することはできず、〈犬が……〉と〈……が走っている〉という部分に切り分け、その2つを組み合わせることで全体をカテゴリー化するという過程である。両者の組み合わせは、空所部分を補い合うことを通じた相互的なカテゴリー化となっている。つまり、〈犬が走っている〉は〈犬が……〉の一種でも、〈……が走っている〉の一種でもあり、〈犬が……〉は〈……が走っている〉と整合的であるように、また〈……が走っている〉は〈犬が……〉と整合的であるように調整される。たとえば犬の走り方を知っている人であれば、ここでの〈……が走っている〉はいかにも犬らしい走り方をしたものとして理解することになるということである。このような、切り分けおよび相互的なカテゴリー化は、これらのカテゴリーがブロックであれば不可能となってしまうだろう。このようなことが可能なのは、これらが神経ネットワークの活性化パターンとして実現する一種の出来事であるためである (**Langacker 2000**)。

複合的な言語記号の使用は、このような対象のカテゴリー化を反映し、動的なものとなっている。「犬が」や「走っている」のような記号は、〈犬が……〉や〈……が走っている〉をカテゴリー化し、それらに注意を向けるための手がかりとして機能しているのである (**Langacker 2016b**)。私たちは〈犬〉や〈走る〉について多くのことを知っており、それらは言語記号としての「犬」や「走る」の意味を構成する百科事典的知識となっている。しかし、個々の使用においてその知識の全体が（等しく）使用されることはなく、何らかの側面が焦点化されることになる。この点で定常性の想定は具体的なレベルの知識においてもまた妥当ではないと言える。さらに、個々の言語記号の意味は、全体としてのカテゴリーに注意を向けるための手がかりとして、どのように貢献しているかによって規定されるものであるため、合成性の想定もまた妥当ではないのである。

4. 動的言語観によるグロス実践における問題の解消

第1発表で提示した1つ目の問題は、文脈が定まってもなお複数の異なる解釈が可能な多義語に関するものであった。具体的には、バスク語の動詞 *ibili* が①《歩いて移動する》と②(様態の指定のない)《移動する》の少なくとも2つの意義を持つ時に、(7)のような例における *ibil* のグロスをどのようにすればよいかという問題である。

- (7) En-e lagun=a ikus-i du-t bide-an ibil-tze-n.
1SG-GEN friend=SG see-PFV PRS-ELS path-LOC ?-GER-LOC
「私は友人が道を歩いているのを見た」

この問題は使用基盤モデルに基づく動的言語観のもとでは以下のような経験的問いとして捉えられる。認知文法では使用事象で用いられているのは、抽象的な語彙項目の知識ではなく、特定の構文に生じた語彙項目がその構文でどのような貢献をしているかという具体的なレベルでの知識であると考えられる(3.1節)。(7)では、語彙項目 *ibili* のスキーマ的(通構文的)な意味を問題にするのではなく、この構文(たとえば *ibili* が主動詞となって経路を表す後置詞句とともに用いられる構文)における *ibili* の意味を考えればよいのである。この構文の具体例として、《歩く》という様態を表現している事例が十分に多く使用されているのであれば、この構文における *ibili* の《歩いて移動する》という意味的貢献は言語知識として定着していると考えられる。逆に、この構文の具体例によって表現されている移動の様態が多種多様であり、それぞれの状況において推論によって導かれるものであるならば、この構文における *ibili* は様態の指定のない《移動する》という意味的貢献を(場合によっては、それに加えて様態を推論させるという貢献も)しているということになる。すると、それに応じて問題のグロスは *walk* または *move* と振ることができるだろう⁴。

一方で、経験的な決着があっても、それをグロスに反映させるのが難しい場合も考えられる。多義語の問題に関して第1発表で取り上げたもうひとつの例を見よう。バスク語の動詞 *eman* には、①《与える》と②《移動させる》の2つの意義を立てることができるが、*liburu=a eman* [*book=SG give*]「本をあげる」のように移動可能なものが目的語となる構文では位置変化と所有権の移動の両方が一体となって焦点化されていることがありうる。事実、Newman (1996) はこうした事象を授与のプロトタイプと考えている。仮にこうしたプロトタイプの授与事象がこの構文における *eman* の意味であったとして、そのグロスは *give* と *put* のどちらにするべきだろうか。ここで、第2発表において文法ラベルが類型論的プロトタイプを通じて理解されていたことを思い出すと、語彙類型論が指針を与えてくれるかもしれない。すなわち、所有権の移動を表す動詞の多義が、位置変化を伴う授与事象をプロトタイプとして通言語的に構造化されているのなら、*give* のような授与動詞をグロスとして振ることで、読者がそれを型論的プロトタイプとして理解することが期待できるのである。

第1発表で提示した2つ目の問題は、語より大きな単位の扱いに関するものであった。具体的には、(8)と(9)はどちらも、全体としては主語の人称と数を意味に含んでいるが、(8)ではそれが助動詞によって明示されているのに対し、(9)にはそれに当たる要素が存在しないというものである。この問題

⁴ 言語記号は、話し手が意図した対象へと聞き手の注意を向けるための手がかりであるとする観点からは、《歩く》と《移動する》のどちらともはっきり定まっていらないような使用もまた許容される。

は、(9) の *proda-l* は三人称単数を表すデフォルトの表現であり、(8) の [*jsem...proda-l*] はそこからの拡張であると考えられることで解消することができる^{5,6}。つまり、(8)・(9) の *proda-l* は表面的には同一の記号であるが、前者は [*jsem...proda-l*] であり、後者は [...*proda-l*] なのである。動的言語観のもとでは、言語記号はブロックではなく、動的なカテゴリー化の現れであるため、このように複数の語が一つのまとまりとして機能することには何ら問題がないと考えられる。

- (8) *Včera jsem konečně proda-l aut-o.*
yesterday AUX.1SG at.last sell-PST.SG.M car-ACC.SG
 「昨日、私はとうとう車を売った」
- (9) *Včera konečně proda-l aut-o.*
yesterday at.last sell-PST.SG.M car-ACC.SG
 「昨日、彼はとうとう車を売った」

また、動的言語観の下では、分析可能性の低いイディオムは使用事象において特定のパターンで共起する複数の語と何らかの概念の結びつきが慣習化し、その過程で構成要素の語と結びついた概念の役割が減じていくことによって生じるものとして捉えられる (Langacker 2017)。それゆえ分析可能性の低いイディオムを構成する語の単独での意味を明示できないことは、問題であるどころか、言語の実情の反映であると言えるのである⁷。

参考文献

- Bybee, Joan (1985) *Morphology*, Amsterdam: John Benjamins. / Langacker, Ronald W. (2000) A dynamic usage-based model. Michael Barlow and Suzanne Kemmer (eds.), *Usage-based models of language*, 1–63. Stanford: CSLI Publications. / Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive grammar: A basic introduction*, Oxford: Oxford University Press. / Langacker, Ronald W. (2016a) Baseline and elaboration. *Cognitive Linguistics* 27: 405–439. / Langacker, Ronald W. (2016b) Toward an integrated view of structure, processing, and discourse. Grzegorz Drożdż (ed.), *Studies in Lexicogrammar: Theory and Applications*, 23–53. Amsterdam and Philadelphia, John Benjamins. / Langacker, Ronald W. (2017) Entrenchment in cognitive grammar. Hans-Jörg Schmid (ed.), *Entrenchment and the psychology of language learning*, 39–56. Berlin: De Gruyter Mouton. / Langacker, Ronald W. (2019) *Morphology in cognitive grammar*. Jenny Audring and Francesca Masini (eds.), *The Oxford handbook of morphological theory*, 346–364. Oxford and New York: Oxford University Press. / Newman, John (1996) *Give*, Berlin: Mouton de Gruyter. / Scott-Phillips, Thom (2014) *Speaking our minds*. New York: Palgrave MacMillan.

⁵ 三人称単数をデフォルトであると考えることが妥当なのは、典型的な使用事象では、話し手・聞き手がともに表現対象ではなく、表現主体である場合であり、また、3節冒頭でも確認したように、複数単数が元になって捉えられるものだからである (Langacker 2008: 3.4.1 節, Langacker 2016a)。類型論的にも、動詞の人称標示において三人称単数は他の人称・数よりもゼロ標示となることが多い (Bybee 1985: 54)

⁶ *jsem* と *prodal* を含む節の語順は、[*jsem ... prodal*] のほか、[*jsem prodal ...*] [*prodal jsem ...*] があり得るが、これらは全て一人称単数を表すという点で共通する *prodal* からの拡張として位置づけられる。

⁷ グロスが語 (の部分) を単位として意味または文法機能を示すものである以上、この方法を維持する限り表示に関する実践的な問題は残される。可能な方法としては、意味的貢献が不明確な語にはグロスを振らず空白にする、イディオムを構成する各語にイディオム全体の意味を表示する、イディオムであることを明示する表示を設けるといったものが考えられるが、いずれにしても慣習的なグロス実践をそのまま適用することはできない。